

実習評価ルーブリック策定における表現上の工夫と課題

野 呂 健 一

キャリア研究センター紀要・年報 第8号 抜刷

高 田 短 期 大 学

令和4年3月

実習評価ルーブリック策定における表現上の工夫と課題

野呂 健一

高田短期大学キャリア育成学科

1. はじめに

本学高等教育研究会では介護実習の評価にルーブリックを導入することを検討し、2017年の開発以来、7回の改訂を行ってきた。作成したルーブリックはその都度介護施設での実習評価に用い、実習指導者及び学生からの意見を聴取している。表現上の分かりにくさについては、その都度検討し次回改訂に反映させてきた。また、筆者は2020年に、収集した実習評価ルーブリックに見られる記述の問題について検討し記述している。

本稿は、本学高等教育研究会が作成し、随時改訂してきた介護実習評価ルーブリックにおいて表現上工夫した点をまとめることによって、今後他の分野も含めて、ルーブリックを作成する際の一助となることを目的とする。ルーブリックの記述に分かりにくい表現があると、評価者によって捉え方が異なることも起こり得るため、記述のわかりやすさは評価の信頼性に関わる問題である。加えて、今回のルーブリックで反映できなかった点がないかどうかとも検討する。

2. 先行研究

ルーブリックの記述を問題にした先行研究に山同他(2017)や藤原他(2017)、野呂(2020)がある。

山同他(2017)は、「評価の公平性」を担保するとともに、「到達目標提示」「学習者の自律的な取り組み」を目指して、ルーブリックを作成し改善する過程を報告している。その中で、作成したルーブリックを用い、2つのレポートを5名の教員が評価し、評価に「ずれ」が生じた要因を考察している。その結果、評価にばらつきが生じた要因は、評価観点項目がない場合と評価観点の記述に対する解釈の違いの2つの場合であると述べている。前者は、評価者が評価する必要があると考えた評価観点がルーブリックにない場合に、他の評価観点到含めてしまうことであり、後者は、評価観点の記述に対する解釈が評価者によって異なることである¹。後者の例として、定量化されていない表現が含まれる評価観点について、評価のばらつきが生じるということである²。

藤原他(2017)も山同他(2017)と同様に、作成したルーブリックを用いて、同じレポートを複数の教員が評価し、ばらつきを見ている。項目別に見ると、形式やマナーよりも内容面にばらつきが生じる傾向があり、また、形式ではばらつきの生じやすさが項目によって異なるのに対し、内容面では全体にわたりばらつきが生じたということである³。評価のしにくさの要因については、できていないことの多様性、項目のレベル別記述の不統一、あいまい表現などが挙げられている。あいまい表現は山同(2017)が挙げる「定量化されていない表現」に該当すると考えられる。

野呂（2020）は、看護・介護分野を中心に実習評価ルーブリックを収集し、評価基準の記述について個別に検討した。曖昧性や漠然性のために評価のぶれが生じる恐れのあるものを抽出し、日本語学的観点から検討している。曖昧性や漠然性は混同されることが多いが、曖昧性とは、1つの表現が2通り以上の異なる意味に解釈できることを指し、漠然性とは、1つの表現の意味があやふやで不明瞭であることを指す⁴。藤原他（2017）における「あいまい表現」は、漠然性の例だと考えられる。さらに、曖昧性や漠然性によるもののほか、藤原他（2017）で挙げられている「できていないことの多様性」に該当する、1つの評価基準に複数の観点が盛り込まれる例も挙げられている⁵。

山同他（2017）と藤原他（2017）は、作成したルーブリックを用い複数の評価者が評価してばらつきが多い項目について要因を考察している。一方、野呂（2020）は、収集したルーブリックを基に、日本語学的観点から表現の問題点を指摘している。漠然性を含んだ表現の問題点については、いずれの研究においても指摘されているほか、藤原他（2017）と野呂（2020）では、1つの評価基準に複数の観点を盛り込むことの問題点を指摘している。

3. 考察対象とした実習評価ルーブリックについて

本学高等研究会が作成した介護実習評価ルーブリックは、三重県介護福祉士養成施設協議会が作成した『介護実習の手引き・介護実習ノート』（以下、実習ノートと呼ぶ）に記載されている実習評価基準を基に作成したものである。実習ノートでは、実習態度（5項目）、自己目標（2項目）、コミュニケーション（1項目）、介護活動（8項目）、施設理解（2項目）のそれぞれの評価項目について1つ以上の評価着眼点が記載され、さらにそれぞれの評価着眼点について複数の評価基準が定められている（表1参照）。

表1 『介護実習の手引き・介護実習ノート』介護実習Ⅰ 評価基準（抜粋）

	評価項目	評価着眼点	評価基準
実習態度	積極性	意欲的に取り組む姿勢が見られる	利用者や職員の名前を覚える。
			興味や関心を広げる。
			わからなかったことを継続して考える。
			職員と今後の学習課題について話をする。
			質問や意見を伝える機会を積極的に活用する。
	協調性	職員・利用者・実習生との協調性がある	職員の助言・指導を受け入れる。
			丁寧な言葉遣いをする。
			自分の都合だけで行動しない。
			相手のプライドを傷つけないかわりをする。
			自己表現の仕方として、自然な笑顔、挨拶をする。

実習ノートの実習評価基準をもとに、介護実習評価ルーブリックを作成した(表2参照)。実習ノートの「評価基準」を参考に、実習で達成すべき「評価指標(目標)」を定め、それぞれについて3段階の「評価基準」を定めた。評価指標や評価基準の表現については、実習ノートを参考にしつつも、評価者にとって分かりやすい表現になるよう、研究会で検討を重ねてきた。

表2 本学高等教育研究会が作成した介護実習評価ルーブリック(抜粋)

評価領域	評価項目	評価着眼点	評価指標(目標)	1点 できない しようしない	3点 努力中 しようしている	5点 実習の目標 できる、ほぼ達成	実習Ⅰ	実習Ⅱ	コメント欄	介護福祉士の姿
実習態度	積極性	意欲的に取り組む姿がみられる	利用者や職員の名前を覚える	利用者や職員を名前で呼べない。	利用者や職員の名前を言えない時があるが、できるだけ呼ぼうとしている	利用者や職員の名前を覚え、名前で呼んでいる	___点	___点		利用者や職員を、TPOに応じて名前で呼んでいる。
			わからないことを聞き、聞いた上で問題点を理解し、解決に向け行動する	実習でわからなかったことをそのままにしている	実習でわからなかったことを職員に質問をして、問題点を理解するが行動に移さない	実習でわからないことを職員に質問して、問題点を理解し、解決のための行動に移せる	___点	___点		わからないことは他の職員に質問して、問題点を理解し、課題解決のため行動に移せる。さらに行動の振り返りを行っている。
			指摘された実習中の学習課題に気づき、改善に努める	指摘された実習中の課題を改善しようとする姿が見られない	指摘された実習中の課題を改善しようとしている	指摘された実習中の課題を改善に努めている	___点	___点		他の職員から指摘されたことを専門職としての課題として理解し、改善に努めている。
			実習中間・最終のカンファレンスの際に積極的に発言する	実習中間・最終のカンファレンスの際に促されても質問や意見を言えない	実習中間・最終のカンファレンスの際に求めに応じて質問や意見を述べることができる	実習中間・最終のカンファレンスの際に自発的に質問や意見を述べることができる	/	___点		様々なカンファレンスにおいて、積極的に質問をすることができるとともに、自分の意見を述べている
			利用者の話を聞き、必要な情報を得る	利用者とな話をしている様子がない	介護をするにあたって必要な情報を利用者から聞き取ろうとしている。	介護をするにあたって必要な情報を利用者から聞きとり、情報を得ている		___点		介護をするにあたって、常に必要な情報を利用者から聞きとるとともに、情報の信ぴょう性を確認している。

4. 介護実習評価ルーブリックにおける記述の工夫

前章で述べたように、従来用いられていた実習ノートを基に介護実習評価ルーブリックを策定したが、その際、誤解を招く表現を避け、より分かりやすい表現を用いるように工夫をしている。どのような工夫を行ったかを実習ノートでの表現とそれに対応する介護実習評価ルーブリックでの表現を比較しながら述べる。

4.1 観察・評価可能な表現への変更

実習ノートの評価基準では、「考える」「理解する」「知る」のような表現が多く使われている。こうした表現は、当事者の思考や判断に関わる内面を表すものであり、観察することが難しい。介護実習評価ルーブリックでは、なるべく観察・評価可能な表現を用いることとした。

- (1) a わからなかったことを継続して考える。(実習ノート)
 - b 分からないことを聞き、聞いた上で問題点を理解し、解決に向け行動する。(ルーブリック)
- (2) a 施設が地域で果たす役割や機能が理解できる。(実習ノート)
 - b 実習先施設の役割や機能について、実習日誌や訪問前記録等に詳しく表現したり、職員に説明したりできている。(ルーブリック)

(1)a では、「考える」と思考を表す動詞が用いられており、達成できているかを判断することは難しい。それに対して(1)bの「聞く」や「行動する」は具体的な行動を表すため、観察・評価することが可

能である。(2)aの「理解する」も達成できているかを判断することが難しい。この評価項目が「施設理解」であるため、ルーブリックでの評価指標は「理解する」を用いているが、評価基準では(2)bのように観察・評価が可能な動詞に変更している。

次は、実習ノートでは否定形で示されたものを肯定形に変えた例である。

- (3) a 自分の都合だけで行動しない。(実習ノート)
- b 周りの状況を考えて行動できる。(ルーブリック)
- (4) a 私物には勝手に触れない。
- b 職員の指示のもと、私物に触れるときは、利用者に了解を得る。

いずれのペアも同じ事態を述べたものであり、否定形であるか肯定形であるかの違いである。否定形で表される内容に比べ、肯定形で表される内容は容易に観察可能である。そのため、同じ事態を表すのであれば、肯定形で表す方が分かりやすいと言える。

4.2 複数の項目による問題点の解消

ここでは、評価基準に複数の項目が含まれる場合に生じる問題について検討する。
まず、複数の項目の関係が曖昧性を含む場合について述べる。

- (5) a 朝の挨拶、帰りの挨拶は必ず行い、礼儀正しく行動する。(実習ノート)
- b 朝の挨拶、帰りの挨拶を行うなど、礼儀正しく行動する。(ルーブリック)

(5)aにおいて、「挨拶を行う」と「礼儀正しく行動する」こととの関係を考えてみると、並列なのか例示なのかが曖昧である。並列と解釈すると、挨拶をするだけでは不十分で、他の行動が礼儀正しいかも観察しなければならないが、例示ならば、挨拶がきちんと行っていれば概ね礼儀正しく行動していると判断できる。ルーブリックでは例示であると考え、その意味に限定されるように表現の修正を行った。

次に、複数の内容が含まれることによって評価が難しくなる場合について述べる。

- (6) a 報告は適切な時間にメモを活用し、5W1H (いつ・どこで・誰が・何を・どのように) を明確にした内容とする。(実習ノート)
- b 適切な時間に、5W1H (いつ・どこで・誰が・何を・どのように) を明確にした内容で報告している。(ルーブリック)

(6)aは、評価項目「報告」の中の1つの評価基準である。「適切な時間」「メモを活用」「5W1Hを明確に」という複数の内容が含まれている。すべてを達成していれば、あるいは、すべてが達成されていなければ問題はないが、達成できたことと達成できなかったことがある場合が問題となる。例えば、「メ

モを活用」し、「5W1Hを明確に」して報告していたが、「適切な時間」に行われなかった場合、評価に困る。ルーブリックでは「メモを活用」は重視する必要はないと考え、(6b)のように修正した。それでもなお、「適切な時間」と「5W1Hを明確に」2つの内容が含まれているが、今回のルーブリックは「1・3・5」の3段階の中間点をつけることができるため、両方が達成されれば5点、一方のみであれば3と5の中間の4点を付けることで、評価に差をつけることができる。

以上見てきたように、1つの評価基準の中に複数の内容を入れると、解釈が曖昧になったり、評価に迷いが出たりすることが多い。1つの評価基準の中に評価すべき内容は1つにするのがよい。そのためには文の形式も複文を避け⁶、単文で記述することが望ましいと言える。

5. 今後検討すべき課題

前章では、実習ノートを基にして作成した介護実習評価ルーブリックにおいて表現上工夫した点を述べた。ここでは、さらに検討すべき点について述べる。

まず、野呂(2020)でも取り上げた漠然性を含む表現である。漠然とした表現を含む記述では、他の評価尺度の記述が不明瞭になりやすいため、境界があやふやにならないように、修飾語等を付加することによって、明確な表現にすることを心掛ける必要がある(野呂2002)。

(7) a いろいろな利用者と話す機会を自ら作ることができる。(ルーブリック評価指標、5点)

b 特定の利用者と話す機会を自ら作ることができるが、それ以外の利用者と話す機会は作れていない。(ルーブリック3点)

(7)aは実習ノートの評価基準を若干修正し、ルーブリックの評価指標と5点の評価基準にしたものであり、(7)bは3点の評価基準である。「いろいろな利用者」か「特定の利用者」かの判断は評価者に委ねられるところが大きいと感じられる。ルーブリックの役割として、学生の内省力・改善力の向上に重きを置かならば問題はないかもしれないが、評価の公平性の担保に重きを置くなら問題が残る。評価者によるばらつきが少なくなるような表現を検討する必要があるだろう⁷。

次に、「理解する」のような表現の使用である。4.1で述べたように、策定した介護実習評価ルーブリックでは、当事者の思考や判断に関わる内面を表す表現を避け、なるべく観察・評価可能な表現を用いることとしたが、以下のように、やむを得ず使用しているところもある。

(8) 理解者の日中の活動を理解する。(ルーブリック)

(9) 受け持ち利用者の人間関係を把握している。(ルーブリック)

(8)(9)とも評価項目「(受け持ち)利用者理解」の中の評価指標である。評価項目「(受け持ち)利用者理解」の11の評価指標のうち、述語を「理解する」「理解している」「理解できる」にしているものが7つ、「把握している」が3つである。評価項目が「理解」であるため、評価指標も「理解」やそれに似た

表現を使うこととなったのである。しかしながら、評価基準にも「理解」のような表現を使うと、評価が困難になることが予想されるため、できる限り観察可能な表現を引き続き検討すべきであろう。

また、4.2 で述べたように、複数の項目による問題点の解消が介護実習評価ルーブリックでは行われたが、若干残されたところもある。

(10)利用者の反応を待ってから、適切な介護ができる。(ルーブリック)

実習ノートでは、「利用者の反応を待つことができる」であったが、ルーブリック策定の議論の中で、反応を待つだけでは不十分ということになり、(10)のようにした経緯がある。評価項目は「観察」であるので、「利用者の反応を待つ」ことが主であるが、「適切な介護」が不十分な場合に、評価に迷う評価者もいるかもしれない。やはり、4.2 で述べたように、1つの評価基準の中に評価すべき内容は1つにするため、単文で記述することが望ましいだろう。

6. おわりに

本稿では、本学高等教育研究会が作成し、随時改訂してきた介護実習評価ルーブリックにおいて表現上工夫した点、及び、今回のルーブリックで不十分であった点を検討した。工夫した点は、なるべく観察・評価可能な表現を用いることとした点と複数の項目が含まれることによる問題点を解消したことである。不十分であった点は、漠然性を含む表現を明確な表現にする点である。また、工夫した点で挙げた2つについても、一部解消できなかった箇所が残された。

今回指摘した点は、介護実習評価ルーブリックに限らず、ルーブリック全般に通用すると考えられる。評価者にとって分かりやすく、より公平性を持ったルーブリックにするための参考になることを期待している。

なお、本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究(C)一般 課題番号19K02261 によるものである。

注

- 1 本稿では、評価観点項目がない場合は表現上の問題ではないため考察対象としない。評価観点の記述に対する解釈の違いが、表現上の問題によって生じる場合を考察対象とする。
- 2 山同他（2017）は、定量化されていない表現の例として、「分量が適切である」「わかりやすい文章」のような表現を挙げている。
- 3 形式の下位項目として、文法・段落、句読点、誤字脱字、書式、引用・出典、接続詞、文の長さ、主従関係、参考文献を挙げ、マナーの下位項目として、指定文字数、提出期限が挙げられている。また、内容面の下位項目としては、テーマ、予告、背景説明、本論、考察が挙げられている。
- 4 曖昧な表現の例として、以下のような例が挙げられている。この場合、「ながら」を同時進行とする

か逆接とするかで異なる解釈となる。

受け持ち患者・家族とコミュニケーションを取りながら、信頼関係を築くことの重要性が理解できない。

5 以下の例において、「受け持ち患者のライフスタイルと生活環境について理解」することと、「その人らしい生活のあり方を考えること」の両方ができない場合は問題ないが、前者はできるが後者まで及ばないという場合はどう評価すべきか疑問が残る。

受け持ち患者のライフスタイルと生活環境について理解したり、その人らしい生活のあり方を考えることができない（野呂 2020）。

6 単一の述語を中心として構成された文を「単文」と呼び、複数の述語からなる文を「複文」と呼ぶ（益岡・田窪 1992）

7 スティーブンス他（2014）は、ルーブリックの役割には大きく分けて、①評価者の公平性の担保、②教員の負担軽減、③学生の内省力・改善力の向上の3点があると述べている。

引用文献

ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ（佐藤浩章監訳）（2014）『大学教員のためのルーブリック 評価入門』玉川大学出版部

野呂健一（2020）「実習評価ルーブリック評価基準に見られる記述の問題点」『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』6号，pp.20-27.

藤浦五月・宇野聖子・小針奈津美・坂井菜緒・柴田幸子・服部真子・中川純子・長松谷有紀（2017）「複数教員によるルーブリック記述の検証と課題：一全学を対象とした初年次レポート課題から」『日本語教育方法研究会誌』24巻1号，pp.84-85.

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版

山同丹々子・高橋雅子・伊藤奈津美・藤本朋美・安田励子（2017）「ルーブリック作成と評価観点の「ずれ」の分析：上級前半レベルのレポート課題」『早稲田日本語教育実践研究』5号，早稲田大学日本語教育研究センター，pp.123-130.